

[010]北鮮演習林植物調査

初島, 住彦
九州帝國大學北鮮演習林

<https://doi.org/10.15017/14213>

出版情報 : 九州帝国大学農学部演習林報告. 10, pp.1-175, 1938-07-30. 九州大学農学部附属演習林
バージョン :
権利関係 :

三、演習林に於ける森林植生概況

演習林の下部は多年濫伐の結果個有の林相は破壊せられたるも、谷通りには尙鬱蒼と茂れる森林残存する所あるを以て以下之等森林に就きその植生概況を述べて見ん。

篤所嶺下部の谷 谷間の部分に普通見らるゝ喬木はテウセンモミ、タウシラベ、ドロ、ヤチダモ、モンゴリナラ、マンシウウリハダ、オヒヨウニレ、ノニレ、オホバヤナギ、テウセンヤマナラシ等にして之等の下部にはテウセンアサノハカヘデ、カウライバツコヤナギ、マンシウウリハダ、エゾウコギ、オホモミデスグリ、ビロードウツギ、マンシウハシドイ、イトツリバナ、ミヤマタタビ等疎生し、更に之等の下部にはノブキ、テウセンチャルメルサウ、ヒメマヒヅルサウ、タガネサウ、ヤマブキシヨウマ、ナンテンハギ、オホダイコンサウ、ヒカゲスゲ、ホソバヒカゲスゲ、ホタルブクロ、ウサギシダ、アキノキリンサウ、ツバメオモト、ヒロハヒトツバヨモギ、オホホタルサイコ、エゾイチゲ、エゾノヨツバムグラ、ハコネサウ、オクヤマシダ、オホバキセワタ、タウサハルリサウ、クロバナウマノミツバ、ミヤマタニタデ、ルリクサボタン、クルマバツクバネサウ、ルキエフシヨウマ、トクサ、コミヤマカタバミ、タウユキザサ、ハナフウロ等の草本類多し。

篤所嶺及関峰間の谷 上木としてはドロノキ、ヤチダモ等の外アムールシナノキ、イタヤカヘデ、カウライヤナギ、カライヌエンジユ等多くテウセンモミ、タウシラベ、マンシウシラカバ、エゾノダケカンバ等を混淆し、之等喬木の下部又は間にはマンシウハシドイ(多し)、ハナハシドイ、エゾノウハミツザクラ、ウラボシザクラ、テウセンハウチハ、テウセンアサノハカヘデ等の小喬木の外エゾウコギ、オホツノハシバミ、ホザキノナ、カマド等の灌木認めらる。下草としてはラシヨウモンカヅラ、ホソバメシダ、ミヤマシダ、クサソテツ、タウサハルリサウ、カウライカノコ、エゾアゼスゲ、ツルネコノメサウ、マンシウネコノメサウ、オホイハボタン、マルバネコノメサウ、クロバナウマノミツバ、テウセンタピラコ、ウサギシダ等多し。更に同所附近の或る谷に於てはやはりドロノキ、アムールシナノキ、テリハニレ、イタヤカヘデ等の喬木の外テウセンヤマナラシ、シベリアハンノキ、カウライヤナギ等

の陽性喬木多く、之等の下部又は間にはテウセンクロツバラ、ウラボシザクラ、テウセンハウチハ、アムールキハダ、エゾノウハミヅザクラ、シラゲナ、カマド、マンシウハシドイ、マンシウウリハダ等の小喬木多く、林下にはオホツノハシバミ、エゾヤマハギ、カンボク、ネムロブシダマ、ホザキナ、カマド、オホタカネバラ、イトツリバナ、タウウツギ、ケコマユミ等見られテウセンヤマブダウ、テウセンゴミシ等の蔓性灌木も認めらる。下草としてはオホヒカゲスゲ、ラショウモンカツラ最も優勢にしてタガネサウ、オホハリスゲ、アカスゲ、ウスイロスゲ、ヒカゲスゲ、ハナマガリスゲ、イブキヌカボ等の莎草、禾本の外ヤマブキシヨウマ、キンミヅヒキ、ナンテンハギ、カウライシヨウマ、エゾイチゲ、エゾノタチツボスミレ、マンセンオホキヌタサウ、ヒロハヒトツバヨモギ、オホホタルサイコ、クサレダマ、ニホヒシヤジン、テウセンタビラコ、タウユキザサ、クロバナウマノミツバ、エゾオドリコサウ、カメバヒキオコシ、コンロンサウ、オホヤマハコベ、ノブキ、ハナフウロ、タツタサウ、オホバキセワタ、オホヤマフスマ、レイジンカツラ、カウライハナカツラ、*Cacalia* sp. ミヤマバイケイサウ、テウセンノコンギク、テウセンセツブンサウ等多し。

前記の谷を更に上方に進み海拔 1200 米附近に至れば極めて面白き林相認めらる。即ち谷の兩側は全然異なる森林より成る事にして、谷の北面は谷底より直にモンゴリナラ林をなし、東面は谷底より直にテウセンモミ、タウシラベの混淆林をなし、谷底に於て推移帯なく兩群叢が直接相接しその對照は全く奇異の感あり。本現象は火災の影響に依らざるものとすれば恐らく積雪の關係に依るものにあらざるかと考へらる。北面のモンゴリナラ林はモンゴリナラを優勢木としエゾノダケカンバ、アムールシナノキ、マンシウシラカバを混じ、下木としてはエゾヤマハギ、オホツノハシバミ、タウウツギ、イトツリバナ等多し。下草はワラビ、シナヲケラ、ソバナ、テウセンノコンギク、ヒロハヒトツバヨモギ、ハナフウロ、スズラン、コエンドウ、ホソバヒカゲスゲ、ヒカゲスゲ、ホタルブクロ、ホソバノキリンサウ、オホヒカゲスゲ等多く、キジムシロ、エゾイチゲ、ナンテンハギ、オホミヤマカラマツ、ミヤマバイケイサウ、エゾノヨツバムグラ等も稀に認めらる。谷底の水邊にはホザキノナ

ナカマド最も多く、アムールニハトコ、ドロ、エゾウコギ、カンボク等の木本類の外クサツテツ、ホソバイラクサ、ヨブスマサウ、テウセンウスユキサウ、コンロンサウ、ラシヨウモンカツラ、セイタカブシ、オホダイコンサウ、ツルネコノメサウ、オホバキセワタ、ルリクサボタン、タウサハルリサウ、テウセンチャルメルサウ、エゾバウフウ、クロバナウマノミツバ等多し。

谷の東面はテウセンモミとタウシラベの略同一割合の混淆林よりなり、殆んど純林状を呈するも所々にエゾノダケカンバ、マンシウシラカバ、アムールシナノキ等の大木を混入す。之は明かに本林が一時裸地となり當時優勢を占めし上記樺の類がモミ類の侵入により漸次衰退の運命を辿りつゝあるを示すものなり。林下には落葉の類可成り厚く堆積し、モミ類の稚樹は認められざるも腐朽せる倒木上、林縁等には可成多数の稚樹認めらる。林内は比較的暗く他の樹木の侵入は殆んど認められざるも林縁に近き林内にはラガラバナ、ヒロハツリバナ、テウセンアサノハカヘデ、イトツリバナ、グミヘウタンボク、ヒロハツリバナ等の小喬木、灌木等認めらる。下草は蘚類を主とし之等の間にはハコネサウ(多)、ミヤマシダ(多)、ホソバメシダ、コミヤマカタバミ、エゾバウフウ、タガネサウ、アカスゲ、トクサ、ツバメオモト、ジンヤウイチヤクサウ、ホソバワチガヒサウ、テウセンシロカネサウ等認めらる。

次に谷を更に進み 1300 米附近の峯筋に出ればモミ林はモンゴリナラ林により置換せらるゝに至る。今一例として篤所嶺の峠より閔峰に至る約半里に亘る尾根筋の森林に就きその概略を述べて見ん。尾根の部分はエゾノダケカンバ及モンゴリナラの混淆林より成りアムールシナノキ、マンシウシラカバを混する部分あり、下木としてはエゾヤマハギ最も多くアイツシモツケ、オホタカネバラ、クロヅル、マンシウベニバナヘウタンボク、オホツノハシバミ等の灌木を主とし稀にテウセンモミの稚樹を混する事あり。下草としてはエゾゼンテイクア、ワラビ最も多くテウセンノコンギク、スズラン、シナオケラ、ニホヒシヤジン、ヤナギラン、キバナアツモリ、コエンドウ、ホソバヒカゲスゲ(多)、オホヒカゲスゲ、テウセンアマドコロ、カウライハママギ、オホホタルサイコ、ヤマヂスゲ、タカネキンバウゲ、シホガマガク、カウライタムラサウ、エゾノヤマブキシヨウマ、オホミヤマカラマツ、テウセンノ

ギク等普通にして稀に見るものとしてヒロハヒトツバヨモギ、カウライハンシヤウヅル、ナンテンハギ、ハナフクロ、ヤナギタンポポ、スゲユリ、コアヤメ、キンミヅヒキ、アキノキリンサウ、ホソバマ、コナ、ベニバナイチヤクサウ、カウライシヨウマ、エゾノクガイサウ等あり。関峰の頂上附近には相當廣い範圍に亘り白色の樹肌を有する幼齡のマンシウシラカバ及エゾノダケカンバの一齊林認めらる。本林は明かに火災後一齊に發生せる林にして10年生内外のマンシウシラカバ及エゾノダケカンバよりなるも所によりてはテウセンカラマツを混じ其他の樹種を殆んど混入せず。林内にはヤマブキシヨウマ、カウライシヨウマの二者最も優勢にしてヨブスマサウ、イチゴツナギ一種、カウライタムラサウ、オニオタカラカウ、カラフトヤマボクチ、ホテИАツモリ、ヤマヂスゲ、ウスイロスゲ、エゾノクガイサウ、ヒメマヒヅルサウ、コエンドウ、ワレモカウ、テウセンノコンギク、クロヅル等普通なり。更に関峰の頂上附近に近づけばあたり一帯はテウセンカラマツの純林よりなるも生長状態は一般に良好ならず関峰頂上附近にては生育殊に悪しく樹高5m内外のもの多し。頂上の草原にはゲンカイツツジ、アムールニハトコ、ピロードウツギ、クロヅル、キンロウバイ等の灌木疎生し草本としてはヤナギラン、ヲカオグルマ、イハノガリヤス、セツカヤマネギ、ヤマボクチ、ホソバヒカゲスゲ、オミナヘシ、ホソバキリンサウ、ヒメマヒヅルサウ、ヒロハヒトツバヨモギ、タカイチゴ、アヲノイハレンゲ等散生するに過ぎず。

関峰及大関峰間 関峰より大関峰に至る間はやはりテウセンカラマツの純林にして尾根筋は一般に生育状態不良なり。尾根より稍々谷に下れば所によりてはタウシラベ及タウヒの混淆美林ありて全く原生林の状態をなす。かゝる混淆林はタウシラベを主とし之にタウヒを少量混ざる型にして胸高直径20~30cm位のもの普通なり。

漁下面橋洞方面 自動車通過路の澤にはドロ、カウライヤナギ、タイリクキヌヤナギ、シベリアハンノキ、ケシヨウヤナギ、イタヤカヘデ、アムールシナノキ等の喬木多く之等の間にはテウセンモミ、タウシラベ散在的に混淆し、下木としてはエゾノウハミヅザクラ、マンシウハシドイ、テウセンクロツバラ、イトツリバナ、ホザキノナ、カマド等多し。澤より尾根筋に登るに従ひテウセンカラマツ、マンシ

ウシラカバ等の大木多し。

橋洞の上方海拔約 1300 米附近はテウセンカラマツを主とし之にマンシウシラカバ、エゾノダケカンバ、モンゴリナラを混ざる所多く、之等の林床は比較的日光の射入を許す關係上陽性のワラビ、オホヒカゲスゲの二者最も優勢にてヒメアヤメ、ミヤマアツモリサウ、ヒロハヒトツバヨモギ等之に亞ぎ、ナンテンハギ、コエンドウ、シデシヤジン、ニホヒシヤジン、タガネサウ、テウセンノコンギク、オホホタルサイコ、スズラン、ハナフウロ、カンボク、カウライハンシヤウヅル、オホタカネバラ、クロヅル、ゲンカイツツジ、カウライハナカヅラ、マンシウベニバナヘウタンボク、ピロードウツギ、オホミヤマカラマツ等も稀に産す。

更に 1400 米附近はテウセンカラマツの見事なる純林よりなり胸高直徑 30 cm 内外のもの最も多く下木としてはオホツノハシバミ、クロヅル、エゾウコギ、ピロードウツギ、ハナハシドイ等散生し、下草としてはオホヒカゲスゲ、ミヤマシダ、スズラン等優勢にしてワラビ、ナンテンハギ、ハナヘウタンボク、オホホタルサイコ、オニヲタカラカウ、マンシウベニバナヘウタンボク、ヒメマヒヅルサウ、ニツカウカラマツ、コメガヤ、コエンドウ、ヨブスマサウ、グミヘウタンボク、ピロードウツギ等散在す。

西下面南村方面 本方面の森林は漁下面方面の森林に比し著しく趣を異にしテウセンカラマツ、テウセンモミ、タウシラベ、エゾマツ等を缺ぎ主として陽性の潤葉樹より成立す。之は地形に關係すると同時に過度の濫伐の結果に依るものならん。今一例として南村の谷に就き述ぶるに、先づドロノキ、エゾノダケカンバ、エゾヤマナラシ等の外エゾノコリンゴ、アムールシナノキ、イタヤ、オホミニレ、テウセンヤマナラシ、カライヌエンジュ、シラゲナ、カマド、テウセンハシバミ、ゲンカイツツジ、カンボク、ピロードウツギ、オホミヤマバラ、エゾヤマハギ(多)、テウセンクロツバラ、マンシウハシドイ、ホザキナ、カマド、カウライヤナギ、ケシヤウヤナギ、カウライバツコヤナギ、イヌコリヤナギ、ネムロブシダマ、アムールキハダ、タウウツギ、テウセンバイクアウツギ、ウスゲシモツケ、エゾウコギ、テウセンヤマブダウ、エゾノウハミヅザクラ、ウラボシザクラ、オホバサンザシ、マン

シウウマノスズクサ、アイヅシモツケ、ミツバハンシヤウヅル、ケコマユミ等多く下草としてはモ、イロフウロ、マンセンカラマツサウ、シデシヤジン、ウサギシダ、エゾノヨツバムグラ、エゾイチゲ、ハナフウロ、タチイチゴツナギ、ヒロハクサフヂ、スゲユリ、アカヒメユリ、ハナダイコン、キジムシロ、ヒロハヒトツバヨモギ、アマドコロ、カメバヒキオコシ、アレナレノダケ等認めらる。澤を尾根筋に登ればモンゴリナラ多く尾根筋附近には赤松疎生する所あり。

豆満江本流に面したる側は玄武岩の斷崖多く、かゝる所にはヒメウラジロ、イハマウラジロ、ミヤマノキノブ、ヒメヒトツバ、イハクラマゴケ等の羊齒類並にテマリシモツケ、テウセンシヤリシタウ、タウサンセウバラ、イハウメヅル、オヒヨウモ、ヤマハマナス、コホザキヤブサンザシ等の灌木の外サクラサウ、オノエスゲ、ハナチダケサシ、オホコメガヤ等演習林の他の部分に見られざる植物多し。

演習林内に於ける主要森林群叢

演習林内に於ける主要森林群叢を次の五つに大別する事を得。

- 1 テウセンカラマツ群叢
- 2 タウシラベ群叢
- 3 アカマツ群叢
- 4 モンゴリナラ群叢
- 5 ドロ、エゾノダケカンバ、マンシウシラカバ、アムールシナノキ、ヤチダモ等を主とする群叢

1 テウセンカラマツ群叢

本群叢は関峰、大関峰より東は自動車通過路の澤に至る範囲に純林又はエゾノダケカンバ、マンシウシラカバ、アムールシナノキ等と混淆林を形成す。関峰附近にては海拔約 1400 米以上の尾根筋に分布するも東部に於ては海拔 1100 ~ 1200 米附近にも成林する所あり。(附圖参照)

2 タウシラベ群叢

本群叢は通常高地の谷間に分布しタウシラベを主とするも通常テウセンモミを多少混するを普通とす。関峰、大関峰間の谷にはテウセンモミの代りにエゾマツを多

量混ざる部分あり。(詳細附圖参照)

3 アカマツ群叢

本群叢はアカマツの純林よりなるものにして西下面方面の山頂又は低地の岩石地帯に散在しその面積は著しからず。(附圖参照)

4 モンゴリナラ群叢

本群叢は最も分布廣く通常海拔 1000 米以上 1400 米以下の尾根筋に分布するも特に西下面方面に於て發達良好なり。モンゴリナラを優勢木とし林下にはエゾヤマハギ最も優勢なる型なり。(附圖参照)

5 ドロ、エゾノタケカンバ、マンシウシラカバ、アムールシナノキ、ヤチダモ等を主とする群叢

本群叢は通常中高地以下の澤通りの森林を形成しその構造は極めて複雑にして明瞭ならず。又安定せる群落にあらず、群落の更行と共に樺、ドロの類は消失の運命にあるものにして最後迄残存する種類は恐らくイタヤカヘデ、アムールシナノキ、ヤチダモ等の比較的好蔭性の喬木類なるべし。

四、分布上注意すべき植物及新植物

Salix thaimasta Kimura ミヤコヤナギ

本種は 1926 年木村有香氏により發表せられたる柳にして type は京都附近なり。今本種を北鮮地方に見出したるは分布上注目するに値す。低地の河原にタイリクキヌヤナギ、テウセンヲノヘヤナギ等と混生し稀なり。(本種の鑑定は木村有香氏に依る)。

Sedum Selskianum Regel et Maack ケキリンサウ (新稱)

従來滿洲には知られたるも朝鮮には新發見のキリンサウの一種にして全株毛茸を有するを特徴とす。低地の岩石地帯に生じ稀なり。

Caltha natans Pallas ヒメエンコウサウ

本種も従來滿洲迄は知られたるも本邦領土にては初發見なり。低地の河中に生じ稀なり。

Sambucus barbinervis Nakai アムールニハトコ